



明治初期の教育者

留 守 伊 豫 子

留守伊豫子は一八〇四年（文化元年）十月、仙台藩領の栗原郡岩ヶ崎（宮城県栗原市）城主中村義景の娘として仙台城下の中の瀬の邸に生まれた。そして、十四歳のとき、水沢城主留守宗衡に嫁いだ。

伊豫子は文学に通じ、特に、和歌もよくし、また、裁縫手芸等もよくできた教養識豊かな姫であった。

江戸時代の水沢には領内の子供たちの勉強するところとして学園所（立生館）があった。その学校が明治維新の際閉鎖されたまゝになつていたが、それが胆沢県を巡視している武田権知事の目に留まり、立生館を郷学校と改めることになり、一八七〇年（明治三年）に再開された。これによって八歳以上のすべての者に教育の扉が開かれ、希望者はこの学校で学ぶことができるようになった。

郷の学校が再開されたとき、伊豫子は出家して貞教院と名のり、年齢も六十七歳であった。しかし、女子にも学問を受けさせたい、そのためには女教師が必要であるという願ひを持っていた。そして、

その願ひが認められ村の学校の教師になる。伊豫子の熱心な指導のおかげで村の学校の名声が高まり、女子の入学者もしだいに増えた。

一八七二年（明治五年）学制の制定によって教育に関する仕組みが変わり、各地区に小学校がつくられた。水沢では勉強したいという子どもが二〇〇人以上にもなったので、一八七三年（明治六年）

一月、表小路枡形に公立塩釜小学校（水沢小学校となる前の名前）が新しく建てられた。その際伊豫子は敷地と建築費を寄付した。そして新校舎の完成後も引き続き教師として、親切、丁寧に子どもたちを教えた。その時、伊豫子はすでに七十歳であった。このように高齢者の伊豫子が教育に力を入れて頑張ったことで一八七五年（明治八年）に水沢県や右大臣岩倉具視から表彰を受け、一八七七年（明治十年）にはさらに岩手県より表彰を受けた。そして、一八八二年（明治十五年）には、長年にわたり女子教育の振興に尽力し、大きな成果を挙げたとして、時の美子皇后様より御歌（和歌）をちやうだいした。

みがかずば 玉も鏡も何かせん

学びの道も かくこそありけり

伊豫子はこの身に余る光栄に感激し、自家製の真綿に次のような和歌を添えて皇后様に送った。

うれしさの 心をいかにのばえまし

君千代ませと 祈るほかなし

時に塩釜小学校にはほかに吉田たよという教員がいて女教師は二人だった。

人生五十年といわれた時代、七十歳を超えてからも現職げんしよくの教師として活躍かつやくしたということは驚おどろくばかりで、これは教育に対する情熱じやうねつが燃え盛さかっていたからであろう。

夫の宗衡との間には、六男四女があったが、いずれも母伊豫子より先立っている。一八八五年（明治十八年）、行いや考え方がしっかりして、多くの人々からの慕したわれ信頼しんぱいされていた伊豫子は八十三歳の高齡しやうがいでその生涯しやうがいを終えている。

*参考文献

『水沢市史 四 近代（I）』

『写真集水沢』

『留守伊豫子伝記』

水沢市史刊行会



留守家の墓（水沢区東町）